



こーひーぶれいく

## バードウォッチング

勝村 庸介

Katsumura Yosuke

バードウォッチング(BW)にはまっている。きっかけは一昨年秋に父親が亡くなり、その遺品として双眼鏡を譲り受けたことである。昭和40年と記載があるので、50年以上の年代物である。私の住んでいる上尾から高崎線で3つ先の北本に北本自然観察公園がある。その隣には北里大学の病院もあり、バス便も頻繁で自宅からだと40分程度で到着する。公園のBW講習に2度ばかり参加したことから始まった。講習会開始前に、公園で初めてシジュウカラ(四十雀)に遭遇した。ネクタイを締め、しかも燕尾服を着て、粋で美しい鳥だと、一目で惚れたのである。それ以来、定期的に北本を訪問し、我がフィールドとみなし、BWを楽しむようになった。同時に、アイソトープ協会に勤務するようになって昼休みは六義園を散策することが日課(65歳以上は年間パスが600円!)なので、天気さえ許せば、どんな鳥に会えるかと期待して出かけている。

昨年の春からは双眼鏡以外にテレスコープを導入。口径82mmで倍率は20-60倍をカバーできる。重量は2kg、それに加えて重い三脚を持ち、週末は早起きして埼玉県内はもちろん、東京都や群馬県、更には千葉県、茨城県にも足を伸ばしている。

BWの何が楽しいのかと、自問自答している。自然の中で新しい鳥に出会い、それぞれが異なった美しさであり、そこが面白い。動いている自分と、移動している鳥とたまたま遭遇して、初めて出会いが成立する。すれ違えば、鳥に会うことはできない。運命的な要素があるように思う。

鳥は目と耳で見つける。偶然目に入ったり、目で見つかりると共に、鳴声や茂みの中を動いている時の音をキャッチする。歩いていると無意識のう

ちに目が鳥を探し、鳴き声が聞こえると目がそちらの方に向く。最近、身体が条件反射化している。

BWの季節は何と言っても晩秋から春の若葉くらいまでだろう。冬になれば落葉樹では葉が落ちて、枝の中の鳥を見つけるのは容易である。夏季は繁る葉の中に入っていると見つけるのは難しい。それでもさえずりが聞こえると手助けになるが、静かにしているとなかなか見つからない。でも、冬は鳥にとって過酷な時期である。木の実も柔らかい葉もなく、虫も少ない時期であり、鳥も地面に降りて食べ物を探すことも多い。春が来て、桜の季節の魅力は格別で、シジュウカラ、メジロ(目白)、ウグイス(鶯)、ヒヨドリ(鶉)更にはスズメ(雀)までも桜の花の蜜を舂めに集まる。スズメの嘴は花の中の蜜の部分に届かないため、花をちぎって蜜を飲む。

協会には一眼レフとズームレンズで野鳥の撮影を楽しんでいる先輩がいる。彼のスマホは撮影した鳥の素晴らしい写真でいっぱいである。彼曰く、良い写真を撮り、自分のみならず他の人もそれを見て楽しんで頂けるのが、魅力なのだそうだ。今の私は野鳥を見つけて観察するだけで、とても写真を撮るだけの余裕はない。

この春は六義園でもカワセミ(翡翠)がペアリング、子育てしていた。10名以上の定年を過ぎたとされる年配バードウォッチャーがハイテク機材を持参で朝早くから追っかけをしている。その中に混ざって、皆さんの写真を拝見させて頂き、ウンチクに耳を傾けている。

先日、パリに用事があり双眼鏡持参で出かけた。これまで気づかなかったがパリには公園や森が日本以上に多い。日本ではあまり見られないカササギ(鶺鴒)が最も目につく。日本で見られるオナガ(尾長)と姿かたちは似てるが、オナガの方が断然美しい。最近は海外に出かけるバードウォッチャーも多いようである。

((公社)日本アイソトープ協会)